

## 突き動かすもの(その二 きっかけ)

松浦 俊博

電車の中でスマホにかじりついて、小さなキーを押し、小さな画面に目を凝らす人たちを見ると何とかならないのかと思ってしまう。「腕時計風のPCのスイッチを入れると、目の前に自分にしか見えないバーチャルスクリーンが現れて、立ったままでも操作ができる」という情景を思い浮かべる。いや待てよ。「視覚は脳で作られるから、スクリーンは不要で手を動かさずに脳ですべて処理できるだろう」と思いは続く。

こういう想像は誰もが日常行う。生理学や電子技術に知識のある人は、具体的にもう一步踏み込んだ想像をするかもしれない。その中には、実現するまで突き進む思いに駆られる人もいる可能性がある。

今年のノーベル生理学・医学賞の受賞者の一人、カリコ女史の女性研究者へのメッセージが新聞に載っていた。「スポットライトを浴びたければ俳優、指示に従いたいなら軍隊、金持ちになりたいなら私は答えを知らない。もし問題を解決したいなら科学がぴったりだ」。ハンガリーから「片道切符」で渡米して、mRNAの研究を続け、「その研究を続けたければ降格と減給」と言われても研究を続け、成果を上げて世の中に認められず、それでもその研究を続けた。コロナワクチン開発でやっと注目された。実に強い人だと感動し、何が彼女を動かしたのかと改めて考えた。

ノーベル賞の受賞対象になるには、最先端のテーマを扱わねばならないだろうが、そうでないテーマでも人を駆りたてることはある。私の娘は、携わった陽子線治療装置の立ち上げて、陽子線が色も音もなく、どこに照射されたか見る術がないことへの不安が引き金になり、その可視化への挑戦を続けている。私も自分が設計した製品の事故原因がわからず、「なぜだ」と強く思ったことがきっかけで十五年間かけて解明に取り組んだ。突き進むきっかけは理屈では説明できない心の動揺や強い思い、言い換えればドキドキやワクワクの類だと思う。

「問題を解決したいなら科学がぴったりだ」。この言葉には共感を覚える。